

大学生サッカー選手における指導者の言葉がけと自己能力評価の関係性

安部久貴¹⁾, 村瀬浩二²⁾

The relationship between coach feedback and self-perceived sport competence in collegiate male soccer players

Hisataka AMBE¹⁾ and Koji MURASE²⁾

Abstract

Coach feedback significantly contributes to players' sport competence associated with intrinsic motivation. However, limited research has examined this relationship with observation in real sport-coaching settings. Therefore, the purpose of this study was to investigate the relationship between coach feedback and players' self-perceived sport competence in actual coaching contexts. One coach and 23 players of a male university soccer club participated in this study. The coach's feedback to the players was recorded for 10 weeks using VTR and, subsequently, categorized into seven domains: (1) positive, (2) negative, (3) instructive, (4) questioning, (5) organizing, (6) friendly, and (7) other. Both before and after receiving coach feedback, players were asked to complete a questionnaire, which consisted of 10 subscales: (1) pass and control decision-making, (2) speed, (3) dribble skill, (4) physical strength, (5) endurance, (6) defense skill, (7) leadership, (8) motivation, (9) long kick skill, (10) heading skill. A significant relationship between soccer players' self-perceived competence and coach feedback was found. The results reveal that frequency of positive feedbacks, such as praise and encouragement, are negatively associated with pass and control decision-making as well as dribble skill. The results further indicate that collegiate male soccer players tend to draw on self-comparison and other internal processes more than positive coach feedback to evaluate their competence. Alternatively, a positive association between negative feedback, such as negative feedbacks, and pass and control decision-making competence was also found. In competitive sports setting, the coach and players would share their common goal as a victory. In this case, players who received negative coach feedback understand the coaches' intent behind that. As a result, negative coach feedback seems to improve players' self-perceived competence in pass and control decision-making areas.

キーワード：サッカー、有能感、言葉がけ

Keywords ; soccer, competence, coach feedback

はじめに

近年、スポーツ指導における体罰の表面化により、スポーツ指導者の指導行動の見直しが求められている。文部科学省に設置された「運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議」(2013)でまとめられている運動部活動での指導のガイドラインでは、生徒の意欲や自主性を促すための効果的な指導法として、指導者と選手間のコミュニケーションの充実が挙げられている。しかしながら、同じく文部科学省で検討された「スポーツ指導者の資質能力向上の

ための有識者会議(タスクフォース)」(2013)の報告によると、効果的な指導に必要なコミュニケーション能力の未熟さが課題として指摘されている。

運動部活動は生徒や学生が主体となって取り組む活動であるため、そこでの効果的な指導とはガイドラインにもあるように選手の意欲や自主性を育み得る指導である。体育・スポーツ心理学分野でも、行動の中に報酬が内在しているかたちの動機づけである内発的動機づけの本質は、自己決定と有能さの認知であると言われている(杉原, 2008)。言い換えれば、自分たちで工夫して練習し、技能を向上させ

1)北海道教育大学 岩見沢校 Hokkaido University of Education Iwamizawa Campus

2)和歌山大学 Wakayama University

ていくことによってよりスポーツの魅力に惹きつけられ、プレーすること自体が報酬・目的である内発的動機づけはより強まっていくと考えられている。つまり、運動部活動における効果的な指導に必要なコミュニケーションとは、内発的動機づけやその主要構成要因である有能感を強化させ得るコミュニケーションのことであると考えられる。

内発的動機づけや有能感と指導者のコミュニケーションを反映し得る指導行動の関係については質問紙による調査が行われている。たとえば、Black & Weiss (1992) は、選手の認知している指導行動と有能感水準の関係性について検討し、パフォーマンス成功時における高頻度の賞賛や賞賛と教示的フィードバックの組み合わせ、およびパフォーマンス失敗時における高頻度の励ましや励ましと教示的フィードバックの組み合わせが、より高い水準の有能感認知と関連していることを明らかにしている。また、Amorose & Horn (2000) は、指導者からの賞賛や励ましといったフィードバックの頻度を高く認知している選手ほど、高い内発的動機づけを示す一方で、注意や叱責といったフィードバックの頻度を高く認知している選手は、低い水準の内発的動機づけを示すことを明らかにしている。さらに最近の研究(松井, 2014)では、賞賛や励ましといったフィードバックの認知のみならず、叱責などのフィードバックの認知も指導者と選手の親和的信頼関係が築けている場合には、内発的動機づけの強化に作用する可能性が示唆されている。

前述してきたように、先行研究(Amorose & Horn, 2000; Black & Weiss, 1992)では賞賛や励ましなどのフィードバックの認知が有能感や内発的動機づけ強化に働くことが示されているほか、指導者と選手の関係性次第では叱責といったフィードバックの認知も肯定的な影響を与える可能性があることが明らかにされている(松井, 2014)。しかしながら、先行研究では、選手に対して指導行動に関する質問紙調査を実施してはいるが、実際の指導行動の観察は行ってはいない。つまり、先行研究では、質問紙調査によって選手の認知する指導行動と内発的動機づけや有能感との関係性は明らかにしたものの、実際の指導行動を観察していないため、実際の指導行動が内発的動機づけや有能感に与える影響については検討されていないのが現状である。

そこで本研究では、指導者のコミュニケーション能力向上に資する基礎的資料を得るために、大学生サッカー選手とその指導者を対象として、これまでの研究の限界点を踏まえ、実際の指導者の選手に対する言葉がけを観察し、指導者の言葉がけと選手の運動有能感の変化との関係性について検討することを目的とした。

方 法

調査対象者および調査期間

関東大学サッカーリーグに所属する一つの大学男子サッカー部の指導者 A (40 代男性、指導歴 25 年) と同部活に所属し、指導者 A が主として指導するチームに所属するフィールドプレイヤー 23 名 (サッカー歴 14.1 ± 1.5 年、FW 6 名 / MF 10 名 / DF 7 名) を調査対象とした。また、調査期間は 2014 年シーズンの前期リーグ戦終了後から後期リーグ戦開始前の連続する 10 週間であった。調査実施前に部活動の責任者に調査の目的などを説明して調査実施の承諾を得た。また、調査実施時に、指導者と各選手にも調査の目的などを簡潔に説明した上、承諾を得てから調査を実施した。

調査内容と手続き

調査期間前後の各選手のサッカーに関する自己能力評価の変容を定量化して測定するために、Ambe et al. (2013) が日本国内の大学生を対象とした調査を通じて作成した 10 の下位尺度、合計 37 項目から構成されている『大学生版 サッカー競技における自己能力評価尺度』を用いて質問紙調査を実施した。この尺度は、「状況に応じたパス&コントロール技能」、「スピード」、「ドリブル技能」、「力強さ」、「持久力」、「守備技能」、「リーダーシップ」、「競技意欲」、「ロングキック技能」と「ヘディング技能」の下位尺度から構成されている(項目などの詳細については表 2 参照)。また使用した尺度については、内的整合性が確認されているほか、内容的妥当性についても十分な検討がなされている。加えて、基準関連妥当性として下位尺度得点および尺度合計点と選手自身で行った能力採点結果の関連性を明らかにしていることから、大学生サッカー選手のサッカーに関する有能感を測定する尺度として上記尺度を使用した。

また、調査期間中の指導者の各選手に対する指導行動を調査するために、11 回の練習の様子をビデオ撮影し、指導者が選手を指導している場面を逐語的に記録、分析した。分析には、Jリーグ下部組織の中学生年代のサッカーコーチの発話を分析して作成された『コーチの発話の質的分析のための 7 指標』(梅崎, 2010)を用いた。この分析方法は、コーチが誰に対して、いつ、どのような言葉がけをしているのかを分析することによって、コーチの発話を 7 つの指標に分類するものである。具体的には、観察場面を指導者が選手の個人名を呼んで言葉がけを行っている場合に限定し、プレー後の評価が「ポジティブ」か「ネガティブ」か、プレー前 / 中の示唆が「直接的」か「間接的」か、プレー外の声かけが「統制的」か「親和的」かの 6 指標に、「その他」を加えた 7 指標に分類した。

上記の指標を基にして、サッカーの指導歴を有し且つ体育・スポーツ心理学を専門とする大学教員とサッカー以外の球技の指導歴を有し且つ体育・スポーツ心理学を専門とする大学教員、サッカーの指導歴を有しスポーツ方法を専門とする大学教員の計3名によって指導者Aの発言を分析した。意見の相違が見られた発言については合議によって再分類した。

統計処理

まず、調査期間前後の質問紙調査によって得られたサッカーに関する自己能力評価の各下位尺度の得点および全下位尺度の合計得点のチーム平均の変化について対応のあるt検定を行った。その後、各選手の調査期間前後の各下位尺度の得点および全下位尺度の合計得点の差からサッカーに関する自己能力評価の変化量を算出し、分類された指導者から対象選手への各種言葉がけの頻度との相関分析を行った。なお、分析にはIBM SPSS Statistics 22.0を用い、統計学的な有意水準は5%とした。

結 果

指導者の言葉がけの分類

本研究では、合計356回の指導者の各種言葉がけが観察され、3人の分析者の一致率は87%であった。そのうち、「オーライ。オーライ。いいぞ。いいぞ●●（以下、●●は選手名を示す）。」といった、ポジティブなプレー後の評価は81回（22.8%）確認された。また、「そうそう、●●。今のところ幅で調節な。幅で調節な。」といった、プレー後のポジティブな評価に続いて直接的な示唆が与えられた場合も、本研究ではポジティブなプレー後の評価として分類した。一方、「ワイド使って。下がる動きが遅い、●●。」や「もっと詰める、●●。甘い甘い。」といった、否定的な表現によるプレー後の指摘を含むプレー後のネガティブな評価は52回（14.6%）確認された。この他、プレー前

と中の直接的な示唆は133回（37.4%）確認されており、具体的には、「はい、抑えに行け、抑えに行け、おい。●●、もっと抑えに行け、●●」といった発言などが分類された。一方、「●●と●●、誰がチャレンジして、誰がカバーリングするのか。」といった間接的なプレー前と中の示唆は11回（3.1%）確認された。さらに、プレー外の声かけとしては、「はい、●●。●●。こっち。代われ。」といった指示を含む統制的声かけは56回（15.7%）、「おい、●●どうだ。お前。…大丈夫？」などのケガの対処を含む親和的な声かけは23回（6.5%）確認された。しかしながら、その他に分類される言葉がけに関しては、本研究では観察されなかった。いつ、どの言葉がけがどれくらいの頻度で使用されていたのかについては表1に示した。

選手のサッカーに関する有能感の変化と指導者の言葉がけの関係

選手の自己能力評価については、チーム全体としては10週間の調査前後において有意な変化は確認されなかった（表2参照）。しかしながら、本研究では、各選手の変化と指導者の言葉がけの関係性に着目していることから、選手の能力評価の変化量とその選手に対する指導者の各種言葉がけとの相関関係について検討した。その結果、プレー後のポジティブな評価の頻度は「状況に応じたパス&コントロール技能」の下位尺度と「ドリブル技能」の下位尺度の変化量と、それぞれ相関係数 $r = -0.518$ ($p < .05$) と $r = -0.440$ ($p < .05$) を示したことから、中程度の有意な負の相関関係にあることが明らかになった（表3参照）。一方、プレー後のネガティブな評価の頻度は「状況に応じたパス&コントロール技能」の下位尺度の変化量と相関係数 $r = 0.438$ ($p < .05$) を示したことから、中程度の有意な正の相関関係にあることが明らかになった（表3参照）。なお、上記の有意差の確認された相関については、散布図による検討を行った上で切断効果による相関ではないと判断した。

表1 練習時における指導者の各種言葉がけの頻度（単位：回）

	練習①	練習②	練習③	練習④	練習⑤	練習⑥	練習⑦	練習⑧	練習⑨	練習⑩	練習⑪	合計
ポジティブ	12	16	7	15	1	5	0	7	3	6	9	81
ネガティブ	9	8	6	8	5	1	2	0	5	4	4	52
直接的	24	13	6	20	1	5	20	7	17	10	10	133
間接的	1	6	0	0	0	1	0	1	0	1	1	11
統制的	4	2	6	3	3	2	1	5	21	1	8	56
親和的	3	1	2	0	3	3	0	1	2	4	4	23
合計	53	46	27	46	13	17	23	21	48	26	36	356

表2 調査前後における自己能力評価の下位尺度および全下位尺度合計得点

下位尺度名と項目	調査前		調査後
F1 状況に応じたパス&コントロール技能	40.9 ± 6.5	<i>n.s.</i>	41.6 ± 5.6
20 次のプレーをしやすい場所にボールを止めることができる			
30 強いパスでも正確にコントロールできる			
14 プレッシャーのかかった状況でもボールを正確に止めることができる			
10 パスミスが多い (R)			
1 動きながらでも正確にボールをコントロールすることができる			
6 プレー中に周りの状況をしっかりと把握できている			
25 プレー中の視野が広い			
35 常に次のプレーのイメージをもってプレーしている			
18 強く正確なショートパスを出すことができる			
F2 スピード	16.8 ± 6.9	<i>n.s.</i>	16.6 ± 6.5
12 短距離走には自信がある			
29 足が速い			
21 スピードで相手を振り切ることができる			
3 身体能力が優れている			
F3 ドリブル技能	16.6 ± 5.7	<i>n.s.</i>	16.4 ± 5.2
26 ドリブル突破することができる			
15 ドリブルテクニックに優れている			
37 自ら仕掛けて一人で局面を打開することができる			
2 ドリブル中に相手にフェイントをかけるのが得意である			
F4 力強さ	17.3 ± 2.8	<i>n.s.</i>	17.3 ± 2.3
16 体の線が細い (R)			
27 対人プレーで当たり負けはしない			
7 相手にぶつかられても倒れない			
36 体幹がしっかりしていて体がぶれない			
F5 持久力	12.3 ± 1.8	<i>n.s.</i>	12.5 ± 1.7
32 スタミナがない (R)			
4 90分間走り続けるだけの体力がある			
22 試合中の運動量が豊富である			
F6 守備技能	17.7 ± 2.8	<i>n.s.</i>	17.2 ± 2.9
8 相手のかけるフェイントには引かからない			
23 守備での1対1には自信がある			
31 ドリブルで抜かれてしまうことがよくある (R)			
17 相手選手のパスの出どころや次のプレーを読むのが得意である			
F7 リーダーシップ	13.3 ± 2.8	<i>n.s.</i>	12.9 ± 3.0
34 目標を達成するためにチームを引っ張っていくことができる			
5 チームを一つにまとめることができる			
19 味方選手に適切なコーチングができる			
F8 競技意欲	12.1 ± 1.7	<i>n.s.</i>	11.7 ± 1.7
11 練習や試合に意欲的に取り組んでいる			
24 練習や試合で絶対に負けたくないという気持ちを持っている			
F9 ロングキック技能	9.5 ± 2.2	<i>n.s.</i>	9.4 ± 2.0
28 様々な種類のキックを蹴ることができる			
9 ロングフィードが得意である			
F10 ヘディング技能	8.2 ± 2.7	<i>n.s.</i>	8.3 ± 2.8
13 ジャンプ力は他人より優れている			
33 ヘディングには自信がある			
全下位尺度合計	164.6 ± 22.2	<i>n.s.</i>	164.0 ± 19.0

n.s. : not significant, (R): 逆転項目

考 察

本研究は、質問紙を用いて調査期間中の選手の自己能力評価の変化を定量化し、その変化量と指導者の言葉がけの関係性について検討することを目的として行われた。その結果、賞賛といったポジティブな評価を受ける頻度が高い選手ほど、「状況に応じたパス&コントロール技能」や「ドリブル技能」に関する有能感が低下している可能性が示唆された。一方で、否定的なフィードバックを含むネガティブな評価を受ける頻度が高い選手ほど、「状況に応じたパス&コントロール技能」の有能感が向上する可能性が示唆された。

まず、本研究では大学生のサッカーに関する自己能力評価の下位尺度のうち、「状況に応じたパス&コントロール技能」と「ドリブル技能」に関する下位尺度でしか指導者の言葉がけとの関連性を示さなかった。キック、トラップ、ドリブルとヘディングの90分のサッカーの試合中の使用頻度については、選手1名の平均としてキックが約37～52回、トラップが約16～30回、ドリブルが約9～19回、ヘディングが約5～9回という数値が報告されている(掛水・大橋, 1996)。したがって、この結果は、サッカーで特に発現頻度の高いプレーに関して指導者の言葉がけが行われていたことを反映していると考えられる。

次に、高頻度の肯定的な言葉がけが、「状況に応じたパス&コントロール技能」や「ドリブル技能」といった有能感の低下との関連性を示した原因の一つとしては、選手が自らの有能感を指導者からの肯定的な言葉がけ以外の要因を基に行っていたことを挙げることができる。Horn et al. (1993) は、17歳以上の青年は認知的成熟に伴って、有能性の判断基準として自己比較や内在化された達成基準を用いるようになることを明らかにしている。本研究の対象者は競技歴の平均が14.1 ± 1.5年の大学選手であったことから、認知面および経験面から考えて、主として自己比較や内在的な達成基準を用いて自己の能力を評価してい

たと考えられる。特に、「状況に応じたパス&コントロール技能」や「ドリブル技能」は、選手自身がボールを有している状態での技能であり、パフォーマンスの成否が選手にも判断し易いという特徴を有している。それゆえ、一時的なパフォーマンスの成否に対する指導者からの肯定的な評価が、選手の自己比較や内在化された達成基準を用いた自己評価と一致しない場合、いくら指導者が肯定的な言葉がけをしたとしても有能性の判断要因として作用せず、結果として指導者からの肯定的な言葉がけの頻度が高くても有能感の低下との関連性が確認された可能性があると考えられる。

また、本研究では、指導者からの否定的な言葉がけの頻度が高い選手ほど「状況に応じたパス&コントロール技能」の有能感が向上していた。少年サッカー指導における指導者の言葉がけが選手のやる気に及ぼす影響について検討した名取(2007)は、競技に対する高い意識と勝利という明確な目標を指導者と共有している場合、否定的な言葉がけであってもその言葉がけを受けた選手は、指導者からの言葉のうらには「悪いプレーだと教えたかったから」といった教授的理由があることを認知して、選手のやる気が高まる可能性があることを明らかにしている。本研究の被験者は国内のアマチュアサッカー界の最高峰である関東学生サッカーリーグでプレーする選手と指導者であったことから、選手、指導者ともに競技に対して高い意識を持ち、勝利という目標の共有がなされていたと考えられる。加えて、否定的な言葉がけには、結果で述べたように「ワイド使って。下がる動きが遅い、●●。」や「もっと詰めて、●●。甘い甘い。」といった否定的な表現ながら、プレーに関する指摘が含まれていた。したがって、競技志向の高い大学生サッカー選手の指導場面では、否定的な表現であっても、指導者が指摘を通じてプレーの成否の判断基準を選手に明確に伝えることによって、選手のやる気が喚起され、その結果、選手の状況判断を伴ったパス、およびボールコントロール技能の向上に繋がったと推察される。

表3 指導者の各種言葉がけと選手の自己能力評価の下位尺度および全下位尺度合計得点との相関関係

	状況に応じた パス&コン ロール技能	スピード	ドリブル 技能	力強さ	持久力	守備技能	リーダー シップ	競技意欲	ロングキック 技能	ヘディング 技能	全下位尺度 合計
ポジティブ	-.518*	.285	-.440*	-.298	-.093	.029	-.099	-.138	-.168	.074	-.352
ネガティブ	.438*	.145	.031	.413	.345	-.016	-.067	-.073	-.323	.040	.248
直接的	-.043	.069	.089	.129	.182	.053	.016	-.253	-.286	-.138	-.006
間接的	-.068	-.108	.034	.080	-.045	.052	-.010	.150	-.149	.183	.015
統制的	-.180	-.139	-.354	-.214	-.013	.332	.026	-.062	-.141	.032	-.196
親和的	.145	-.047	-.112	.257	-.069	-.083	-.059	-.026	-.154	-.079	-.005

*: p < 0.05

本研究の限界点と今後の課題

本研究で確認された肯定的な言葉がけと有能感の負の関連性、および否定的な言葉がけと有能感の正の関連性は、指導者から賞賛や励ましといったフィードバックを多く受けていると認知している選手の有能感と内発的動機づけは高くなる一方で、注意や叱責といったフィードバックを多く認知している選手の有能感と内発的動機づけが低くなる関係性があることを明らかにしている Black & Weiss (1992) や Amorose & Horn (2000) の研究結果とは異なる結果であった。

この差異を引き起こした原因の1つとして、実際の指導者の言葉がけを調査対象としたのか、質問紙調査によって得られた認知された指導行動を調査対象にしたのか、ということ挙げることができる。つまり、指導者の言葉がけを各選手がどのように認知するのかについては選手次第であるため、このような実際と認知の違いが起こっていると考えられる。指導者の言葉がけが選手の有能感、延いては内発的動機づけに与える影響についてより詳細に検討していくためには、実際の言葉がけと認知された言葉がけの違いについて、認知に影響を及ぼし得る要因の検討も含めて明らかにしていく必要がある。

また、本研究で用いたプレー後のネガティブな評価の分類には、否定的な表現を用いたプレーに関する指摘も含まれていた。この分類指標は梅崎 (2010) の先行研究に倣ったものであったが、これら否定的な表現を用いたプレーに関する指摘については、否定的な表現の側面を捉えて分類するのか、それともプレーの修正情報を含む指摘の側面を捉えて分類するのかで、研究結果に影響を与える可能性も否定できないことから、今後指導者の言葉がけの分類指標についても再検討が必要であると考えられる。

さらに、本研究結果については、調査期間が影響を与えている可能性も指摘できる。つまり、本研究対象はすでに長期の競技歴を有する大学生サッカー選手であったことから、本研究の調査期間である10週間では、技能の低下、もしくは向上を選手達が実感するのに十分な時間的余裕がなかった可能性がある。これは、10週間の調査前後において有能感の尺度の値にチーム平均として有意な変化が確認されなかったことから推察される。したがって、より長期の縦断的調査を実施することによって、本研究結果が、大学サッカー選手が有能感を実感するまでの言葉がけと有能感の一時的な関連性を示しているのか、それとも安定した長期的な関連性を示しているのかについて検証すべきと考える。

謝 辞

本調査にご協力頂きましたチームの指導者および選手の皆様に心よりお礼申し上げます。また、本論文の審査の過程におきまして、貴重なご助言を頂きました査読者と編集委員の先生方に対しまして心よりお礼申し上げます。

付 記

本論文は、日本体育学会第66回大会(2015, 国士舘大学)において発表した資料を再分析したものである。また、本研究の実施に際して、平成26年度 全国大学体育連合大学体育研究助成金(課題番号26-102, 研究代表者: 安部久貴)の助成を受けた。

引用文献

- Ambe, H., Matsumoto, D., Sakamoto, E., Murase, K., and Ochiai, M. (2013) Development of a self-perceived soccer competence scale. *Football Science*, 10: 18-27.
- Amorose, A. J., and Horn, T. S. (2000) Intrinsic motivation: Relationships with collegiate athletes' gender, scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 22: 63-84.
- Black, S. J., and Weiss, M. R. (1992) The relationship among perceived coaching behaviors, perceptions of ability, and motivation of in competitive age-group swimmers. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14: 309-325.
- Horn, T. S., Glenn, S. D., and Wentzell, A. B. (1993) Sources of information underlying personal ability judgments in high school athletes. *Pediatric Exercise Science*, 5: 263-274.
- 掛水 隆・大橋二郎 (1996) サッカーおもしろ科学 ―科学的分析に基づいた合理的な練習―. 東京電機大学出版局, pp.44-46.
- 松井幸太 (2014) 高校運動部活動における生徒の内発的動機づけ―指導者のフィードバック行動および生徒と指導者の関係に対する生徒の認知からの検討―. *スポーツ心理学研究*, 41: 51-63
- 名取洋典 (2007) 指導者のことばがけが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響. *教育心理学研究*, 55: 244-254
- 杉原 隆 (2008) 新版 運動指導の心理学 運動学習とモチベーションからの接近. 大修館書店, pp.133-140.
- スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース) (2013) スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)報告書 私たちは未来から「スポーツ」を託されている ―新しい時代にふさわしいコーチング―. (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/017/toushin/1337250.htm) (2016/01/29現在)
- 運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議 (2013) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告書 ～一人一人

の生徒が輝く運動部活動を目指して～. 〈http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1335529.htm〉
(2016/01/29現在)

(2015年9月30日受付)
(2016年1月31日受理)

梅崎高行 (2010) サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討. 教育心理学研究, 58: 298-312.

英文抄録の和訳

指導者の言葉がけは選手の有能感、延いては内発的動機づけに影響を与えられている。しかしながら、実際のスポーツ指導現場における指導者の言葉がけと選手の有能感について、観察法を用いて検討している研究は限られているのが現状である。そこで本研究では、指導現場における指導者の言葉がけと選手のスポーツ有能感の関係性について検討することを目的とした。ある大学男子サッカー部の一人の指導者と23名の選手が調査対象者であった。指導者の言葉がけは10週間記録され、以下の7つの指標に分類された。(1) ポジティブな評価、(2) ネガティブな評価、(3) 直接的な示唆、(4) 間接的な示唆、(5) 統制的声かけ、(6) 親和的声かけ、(7) その他。また、調査期間前後に各選手は10の下位尺度((1) 状況に応じたパス&コントロール技能、(2) スピード、(3) ドリブル技能、(4) 力強さ、(5) 持久力、(6) 守備技能、(7) リーダーシップ、(8) 競技意欲、(9) ロングキック技能、(10) ヘディング技能)から構成される質問紙調査に回答した。その結果、選手の有能感と指導者の言葉がけに有意な関係性があることが明らかになった。まず、賞賛といった肯定的な言葉がけの頻度が、状況に応じたパス&コントロール技能やドリブル技能に関する有能感と負の関連性を示しているが明らかになった。この結果は、大学生サッカー選手は、指導者からの肯定的な言葉がけよりも自己比較や内在化された達成基準を基にして自身の能力評価をしていること示唆している。一方で、指導者から叱責などの言葉がけとパス&コントロール技能に関する有能感に正の関係性が確認された。競技スポーツにおいては、勝利という明確な目標を指導者と選手が共有していると考えられる。その場合、否定的な表現のプレーの指摘であったとしても、指摘を受けた選手は指摘の背後にある指導者の教授的意図を理解できると考えられる。その結果、否定的な評価でも状況に応じたパス&コントロール技能に関する有能感が向上した可能性がある。